

海洋性レクリエーションと 観光資源保全

宇田道隆

〈東海大学教授〉

▷ はじめに ◁

聖書にも「安息日」がある。孔子様も礼と共に楽を説かれて実行された。荘周の夢はいうまでもない。哲人ソクラテスも、饗宴（シンポジア）のうちに真理をたずねた。人間の生活はただあくせく働くばかりではない。そこに余閑の楽しみがある。如何に楽しむかが問題である。衣、食、住、性と大きく区別して、そこにそれぞれ楽しみがあり、老若、貧富でも差がある。まず「金」だ「もうけ」だといってその目的のためガメツイ一生を終える人もある。だが山水を楽しみ、一ぱいの酒で心満ちた思いに、肘を枕に太平楽をのべる人もある。余り考えぬ中途半端が一般大衆である。今世の中はレクリエーションの爆発的なブームだという。全く異常なばかりの行楽熱みたいだが、これで週2回の休日制になったらどんなことになるのかと思われる。

戦前は勤労節儉が美德とされ、当然とれる休暇さえ遠慮勝ちのような気風だったが、戦後は逆に勤労はほどほどにして休暇の楽しみを重視する風潮が強くなり、ウィーク・デーにもゴルフ場へ出かける会社員など結構多い。まるで戦時中の「欲しがりません、勝つまでは」の反動で、親の仇を討つかのように、レジャーに専念、レクリエーションにくり出し、乗り物は満員、旅宿はいっぱい、山も海も人ばかりで、どこへ行ってもおちおち風景を楽しんだり、名所旧跡をゆっくり観賞したりする落ち着きがなくなった。一番この傾向を煽^{あお}っているのは自動車の普及で、騒々しく全国を風靡してしまっただけで、一体この

ようになったもとは経済の成長もあろうし、施設の便やガイド・PRの普及もあろうが、昭和元祿の享楽気分と無責任行政がその背景にあると思われる。現在を楽しむ、後先のことはあんまり考えない風潮、「かねは置くほど値がさがる。あるうち使った方が徳だ」と考え、老若とも「使わねば損だ。使えるうち使っておこう」といった損得の考えも底にあるのではないだろうか？ 今のレジャーの実態を分析して、その恩恵にあずかれない人、被害を受けている人も一面に多くある。観光行政は国民全体の健全な発展を思わねばならない。スイスなどお手本にしたい。

▷ 海洋性レクリエーション ◁

海洋のレジャーといえば、海を相手に余暇を過ごす愉楽であろう。海の性格に人間を解放し、遊楽させるものがある。

避暑、避寒、釣りなどの遊漁や、海水浴、ボート遊び、磯遊び、ヨット遊び、サーフィング、アクワラング潜水、海中公園観光、魚貝藻類などの生物採集その他いろいろある。船にのって周遊もある。とにかく海洋性レクリエーションといえば大体健康な海相手の生活の楽しみと思ってよい。ヨットで世界一周の航海とか、太平洋の横断、縦断となるとこれはもうただのレジャーでなく冒険、探検の部類であり、相当の準備がなければできない事業だから、レクリエーションからははずす。

ところで近年夏が来るたび、鎌倉、逗子、大磯など海水浴場の何十万という人出の物凄さには驚きあきれられるばかりである。し尿、大腸菌の汚水の中で案外病気になるものだと感じると同時に、もう少しなんとかならぬものかと思う。少なくとも汚い下水の放出を止めることぐらい出来そうなものである。何年後には出来ようという気長い話だが、このあんばいだと次々今まで清澄だったところもまた同じように汚濁荒廃の一途をたどるのではないだろうか。このごろでは少し裕福な人たちやお金をためた若人たちはハワイやグアムへ空路海水浴、サーフィンなどに出かけている。新婚旅行の行先もこれまでの九州、北海道ぐらいからこんな太平洋の島々へのびて来た。

もっとも北欧の人びとが冬になると南欧の地中海方面や大西洋カナリヤ群島方面など陽光溢れる空も海も青く澄んだ場所を避寒地にえらんで行くのも道理で、この場合は特に老夫婦などに多い。

観光とスポーツと休養に大別して海洋のレクリエーションをながめてみよう。まず**海洋の観光**といえば、例えば高知県室戸崎や足摺岬の黒潮の迫った海岸の怒濤とか渦潮（足摺岬の付近の臼碁（うすばえ）あたり見事である）、海中の景観ののぞける竜串（たつくし）など、あるいは宮崎県青島付近の千枚岩や檳榔（びんろう）樹林など、愛媛県宇和島に近い鹿島の海中公園とか方々にある。残念ながら東京、名古屋、大阪のような大都会からはどれもかなり離れており、比較的近いところといえば房州白浜方面や、神奈川県油壺方面、伊豆の突端石廊崎方面、名古屋、阪神からは志摩半島、潮岬付近、あるいは日本海側で若狭湾、能登方面や佐渡方面になる。北九州からでは、唐津、壱岐、青海島方面などから五島の方へまたがる。少し離れると天草方面もよい。仙台の方からだと金華山から三陸沿岸にかけてがよい。だが交通の便は案外乏しい現状である。このほか隠岐や秋田の男鹿半島、青森の津軽海峡側、伊豆七島、南西諸島、いよいよ離れて北海道の殊に北西部などに美しい景観がある。だが何処も大かたの人の行楽にたずねるのは夏を中心とする暖候季である。冬のオホーツク海の流水景観などは別である。本当は四国九州は早春の頃もよい。人出の少ない宿など空いた時期に独り訪ねてみるとしみじみその景観の真価を味わった気分になる。ただし季節外れだと交

通など色々不便はあるが。

海の景観に大せつな要素がいろいろあるが、海が汚濁していないことが特に必要である。汚濁防止は観光地の責任であると共に観光客の協力が要請される。投棄（空缶、空瓶、ビニールなど）に対して厳しい罰則が欧米並みに励行されるようにならねばならない。窓からビン一つ投げても1000円ぐらいの罰金はすぐとられる。また片付ける場所と人がいる。

観光資源を大せつに保全すること。 保全によほど努力しなければせっかくの美しい自然が破壊される。そうになると歓楽境か何かに置き換えぬ以上その地の魅力の対象が無くなる。富士五湖や芦の湖畔にホテルやキャンプ場などふえて汚水の始末が不完全なためどんどん湖水に流入し、山紫水明の透明度もぐんぐん落ち、プランクトン繁殖につれて水色もすっかり変わり、やがてこのままでは、観光資源の損亡で変貌を迫られるのは明らかである。摩周湖、洞爺湖など北海道の湖水などもその運命にあるという。経済成長によって息もつまるような大気汚染と失われた緑、あるいは病める草木、汚れた水や食品に取り囲まれた都会生活からせっかく逃避して自然の懐の中で傷いた身心を医そうと来た人びとは、ここにも汚染の姿をみて失望落胆するだろう。そして観光事業にたずさわる人びとは更に新たな未だ荒されていない処女観光資源の開拓を試み、ホテルを建て、道路を作り、盛んにPRする。そうするとまたワットばかり自動車族を中心に集まって来て、いつの間にかそこも開発開発と称して山を削り谷を埋め、海岸に湖水に河川に汚水を注ぎ醜い姿に変えてしまう。美しい日本の自然に憧れ、独自の日本文化の粋にふれたいと思ってくる外国の観光客も期待を裏切られ、高価なホテル代に驚き、やがてだんだん来なくなる。結局悪循環を重ねて観光資源の次から次へと滅亡を重ねて、とり返しのつかぬ破壊された醜汚の姿のみを残すことになる。何故か？ 結局はここでも「もうけ」を急いで、資源の保全を忘れ、樹木を切り倒し、山を崩し、廃水の処理、廃棄物の処理をないがしろにしたからである。金の卵を生む鶏の腹を割いて殺せば元も子もない。小利を追うて大利を求めることを知らぬからである。長続きする繁栄に対する当然なすべき基礎的努力を怠っているからである。小さい汚染を見逃し

て、それが何時の間にか積算され、大量化された場合に起こる汚染の恐しさを予見できない愚かさに基づくものであり、汚染源の民間企業人や一般人だけでなく、行政当局に大きな責任がある。

水質汚濁に対する基準は ppm だけで勘定しても足りない。汚染源からの総量、その生物への影響、生物濃縮が問題である。いつもこれまで基準が甘過ぎて、結局自浄作用を営む細菌の存生活動を許さぬほどの汚染に達し、死の水圏をつくり出して来ている。その誤りをどこでもくり返してやまない。根本的には廃棄物処理の費用をおしむことから起こっている。観光地の隆盛するほど汚染被害防止対策をそれに上回って強化しなければ避け得られない過程が続いて起こる。一たん重症に陥ってから旧態回復は至難となる。観光ゴーストタウン(幽霊町)をつくらぬように予め計画しなければならない。

工業地帯と海洋レクリエーション地帯との共存はもちろん、隣接すら汚濁防止の施設対策を確立しない以上不可能である。汚水は流れて来るし、たとえ拡散によりうすめられようとも排出の持続する限りは蚕食され、何年か後には見る影もない姿となり、観光地だった昔語りを残すのみとなる。東京湾、伊勢湾、大阪湾、どこをとっても昔(数十年前)と今の姿をくらべてみれば、海水浴場の変遷ぶり、その悪変ぶりは明白である。美しい潮に浸り、白砂青松に浸った人の心と糞尿水化した潮と黒い臭い泥砂の海に浸る人の心では大差がある。敷島の大和の国の朝日に匂う桜花を佳とした人がこうまで変わるものかというほかはないだろう。倫理とか、モラルというもの汚染、自然の破壊を止めない限り、打算的行為のかけに打ち消され、やがて神を侮り天に唾吐いた報いは自らが受けねばならない。今の観光政策では施設(完全廃棄物処理を欠く)がふえ、ホテルなど見かけがよくなるほど環境は悪化する一方である。そして観光客も資源を台無しにする方に走っており、ますます状況を困難にする。観光資源保全のためにもはや大きな決意を必要とする時期に来ておるのである。

次に、スポーツとしての海洋レクリエーションを一覧してみよう。海水浴場の海洋学的条件として遊泳に安全な基準となるべき、水温、水質、海潮流、波浪などに、サメのような恐しい害敵防止、油汚染とかし尿投棄

汚染とか、全く不快の念をもたらすものの流入防止、海底と海岸の条件(地質、地形、生物など)がある。海水浴のための沿岸海洋学的研究は観光事業、厚生事業と関連して確立されるべきにも拘らず、今日までほとんど放置されているといってもよい。

災害防止の見地からも重要な問題である。海水浴場の施設を完備し、指導監視員を設けるに官民協力の体制を確立すべきではないだろうか? サーフィン、ヨット、ボート遊びについてもあわせて一貫した研究行政が災害予防のためにも必要であろう。変化する海洋気象的条件、突発する地震津浪などについてもいえる。仮りに今後30年間に99%襲来確実とされる関東大地震が相模湾海底にかつての大正12年9月1日同様の真夏に起こった場合湘南100万人の海岸一帯での混乱と津浪被害はどのようになるだろうか? もちろん陸上でも大騒動であるが海岸でのことも為政者は考えておかねばならない。台風の前後に土用浪や急潮流(沖出し流、沿岸流を含む)に対する災害防止と警報もいる。水質悪変にも衛生上の監視がある。「電気クラグ」(カツオノエボシ、カツオノカンムリ)群の来襲はミミズ腫れ程度で死亡するものはないだろう。だが工場廃水などには危険なものがあり、事故の発生による危険の予想されるところにはもちろん海水浴場など設定できない。化学薬品塔載船沈没、放射能汚染、廃液の投棄拡散など迅速に対策、避難を講ずべきである。海水浴場は積極的に浄化をはかり、砂も水も海岸も絶えず清潔に衛生的にしなければならぬ。水温の変化の大きいときは警告と共に遊泳禁止などの処置も必要になる。

▷ 海洋レクリ

エーションの休養効果 ◁

避暑、避寒、日光浴と共に騒音から守り、きれいな大気、明るい陽光、快適な雰囲気を保つ必要がある。悪臭や人的暴力の危険などを取締まり、安眠でき、充分栄養もとれるように配慮されねばならない。海洋医学の発達、確立による施設が国民健康の立場から特に希望される。

米国にはサバチカル・イヤーといって7年間に教授に与える研究のための1年間の有給休暇がある。まことに

よい制度で、遠い国へ旅行、学者と意見の交換をしたり、生活を楽しみながら著述や新しい研究もできる。平常から十分な給料も与えられておるので、日本などとは大ちがいである。休養年があって大きな仕事もできる。学術振興奨励の効果は大きい。

日本でも近年フェリーボートが方々に出来て、東京～宮崎コースなどもあり、車を持って遠く遊びに行けるようになった。海上の船旅はまことに楽しいもので、シケさえしなければ旅の醍醐味は船旅にあるといってもよいほどである。船速も昔とは格段に速くなった。貨物のコンテナ船で客をのせる30ノットの急行船もあるという。太平洋横断に数日海上生活をエンジョイしながら海鳥やイルカ、飛び魚、洋上の日の出、日没の大景に浩然の気を養うのもよいと思う。フェリーボートは台風は嚴重に警戒しなければならない。1761名も死んだ函館の洞爺丸台風のような惨事は、二度とくりかえしてはならない。台風の浪に弱いフェリーは構造を改善しないと台風期の遠洋航海はアブない。大型欠陥船は論外だ。

▷ 新しい海洋レクリ エーションの将来 ◁

海中展望回廊とかケーブルカー式の展望海中列車なども豪州、フランスなどあちこちで始まっている。やはり優れた魅力的な海中景観をもつ南太平洋とか、地中海とか、カリブ海などがまず目をつけられる。少し水の透視度が落ちても海中生物が豊富で多彩だと客も集まるだろう。日本近海でも薩南～琉球～台湾近海、伊豆七島～小笠原～南洋方面だとよい。日本海側でも夏は比較的透明度が高いので、五島～壱岐・対馬～隠岐～能登（へくら島を含む）～佐渡～久六島～大島、小島の方も可能性がある。

蜃島賊の見物を海中で両国の花火か京洛の大文字でも見物するような気楽な施設も将来できるかも知れない。もちろん海中のことだから危険予防は絶対必要で許可に当たる監督官庁の検査も潜水艦なみの厳重さが求められる。海中スクーター、海中曳航グライダーなどもできている。水中の衝突事故など起こさないように海中交通整理も必要になってくるだろう。ドイツ製のドルフィンという2人乗りの軽便な潜水船が輸入されていたが、あれ

など陸上のスポーツカーみたいなものだろう。ペガサスというフランス製の海中潜航要具は水産大学に購入されていたが、海中オートバイといった感じであった。しかしどれも普及はおそい。

アクワラング・ダイバーのレクリエーション人口は釣り人口と共に急増して来ている。色々な施設も増加した。遊泳とはちがった3次元的運動の楽しさがあり、登山や狩猟に匹敵する。ただ折角の景観や生物などを荒さないようにすることが義務づけられるのは当然であろう。鑑札が必要になる。狩猟的な漁猟や採集をだんだん禁止ないし制限される区域のできるのは当然であろう。海中、海上の諸施設などするには既に利用している水域の漁業組合などと充分了解をつけていてトラブルなど起こさないようにしなければならない。漁業組合が経営の中にはいって共営の形をとるのが一番よいのではないだろうか？ 適地を見つかるにしても地元の高年海に親しんでいる人びとに聞かないと選定も容易ではない。

海中公園も天然の美観に人工の施設を加えて多くの人びとが利用し易いようにするとよい。水中テレビをうまく活用すれば水上でも海中映画劇場におよぶような気分になれるだろう。海中ホテルというのもできよう。猛暑を避けて涼しい海中ホテルの室で昼寝したり、執筆、読書など楽しむこともできるだろう。もちろん、適湿とか室内衛生問題はうまくコントロールされることは前提条件である。ニューオータニのスカイ・ルームみたいにゆっくり回転式の全海中展望室など出来るかも知れない。

魚を放流して芸をみせたり、訓練されたイルカやアザラシを使って水中音響を通じての司令で面白い演技をみせるのも、ハワイのオアフ島のシー・ライフ・パークやサンジエゴ郊外のシー・シアターでもやっている。イルカと戯れる美女の海女の潜水レビューもみた。

海中造園も可能で、色彩に富んだ景観を立体的に天然の岩礁などとうまくマッチさせてつくり、螺旋的や高低のあるモノレール式展望車で一巡するなど、面白いではないか？ イセエビのいっばい天井裏や左右の岩壁にいる洞窟を通り抜けたり、サンゴの林や海ヤギなど、もっとも金目のものは盗難防止も考えなければならないだろう。

スイスのジュネーブ湖でジャック・ピカールなどのつくれたメソスカーフ（バテスカーフの中深観光用）が観

光客をのせて湖底を一巡していたのが1967年夏ごろだった。30ドルというと1万円ぐらいの乗船観光料と記憶する。結構物好きなお客さんが集まっていた。中小生にも有益な教材にもなるような海中生物の生態をみせるような配りも表層から潜航して深くなるほど光線と温度の変化につれてどうなるかがわかるようにできるとよい。しかし管理と経営の問題もあるので思いつきはよほど吟味を要する。サメとかエイとか、ウツボ（ジャウナギ）、タコとかはギャング的、悪魔的存在とみられているが、これら生物のバラエティ生態をうかがえるような、水族と同じレベルでの自然海中動物植物園の一面、一面を巡り観るのも楽しいだろう。客に水上で釣りをさせて、水中でその釣れる魚のさまを横からのぞきみるような設備が伊豆かどこかの観光地にもうあったように思う。ハマチ養殖場（小割イケス）を横へけて投餌のときの魚の狂乱ぶりを横下から眺めるのも面白いだろう。

こうした施設を空想するのは容易だが、何しろ日本は夏から秋にかけて台風があるので、予めほどそれを考慮して施設とその場所を考えねばならない。土佐の南西端の沖ノ島～柏島方面などまく施設できたら、すばらしい魚族の豊富な海底の美観を楽しむことができるだろう。

日本海も夏は静かだし、上下層の水温差が大きく、海面が25°Cの水温でも200m下の方は5°C以下の低温だから、上層には暖水系の魚族が泳いでいるのに、下層にはカナエビや寒流系の生物をみることができる。魚津沖など古代森林海没の実体を直視できよう。

陸奥湾方面など帆立貝の生態も見れるのではないかと三陸、北海道方面だとコンブの林に生息する魚族の姿をみられよう。透明度は夏～秋比較的良好。太平洋側はいくらウネリがあるが、日本海や、オホーツク海の夏は海面が穏やかである。ただし夏の北洋は海霧が多い。土地土地の特性を活かした海洋アトラクションがあると思う。

▷ 海洋観光産業の将来 ◁

国民の健康な海洋レクリエーションの要求は急速に増大しつつある。娯楽、観賞と共に教養的なものも加味したいものである。家族が楽しい一日を過ごせるように設計されたものもほしい。水泳は圧倒的人口を吸収する夏

場のレクリエーションである。全国水泳場を毎年開場前に充分調査点検し、厚生施設として万全を期してほしいし、期間中の保安についても基準の配慮と臨機の措置が望ましい。台風の前後に高浪、沖出し急潮流、冷潮襲来の危険のある場所もあり、一シケあると水深の変わる漂砂地域もある。水質汚染が最も問題である。交通の便利のよい大都市に近い内湾や砂浜海岸で河川の近傍は特にアブない。民間水泳場の大きな所は有料にすると共に一定基準の義務を励行させると共に査察隊、清掃隊が必要であり、反則者は即時料徴収してはどうかと思う。水泳の基本研究データをとる必要があろう。国民皆泳を奨励するため国民宿舎を幼稚園、小中学生対象に増設することが望ましいが、その適地を保全することが大きな仕事になる。海洋汚染を根絶せねばできない。

魚釣り、トロリング（曳縄）などの遊漁は大公望の昔から海洋レクリエーションのトップである。環境のよい所で爽やかな潮風を受けての釣りは磯釣りにしても沖釣りにしてもまことに楽しい。だが魚という対象生物が居なければ成り立たない。魚をふやして遊漁コンクールを楽めるほどの海洋環境を保全したい。潮干狩は昔から春秋彼岸の大潮時の大きな庶民の楽しみだった。だが今は黒い腐泥の異臭が鼻を衝く、浅海に死貝の殻だけが目立っている。生き残った貝だってすっかり病んで毒に侵されている。せっかくのアサリ、ハマグリ、シジミ汁も安心してノドを通らぬありさま。花どきが来ても自動車の排気ガスで花木も薄汚れて枯れてゆき、陸の花見の楽しみも遠くなった。大気、水、土の汚染が生活を破壊し、生活の楽しみを奪い、人体を気づかぬ中に傷害しているのだ。観光資源は今のままでは日本近海に求められなくなる。ホテルや道路や観光施設は立ち並んだが肝心の中身が空っぽになろうとしている。

ボート、ヨット遊び、サーフィング、水上スキー、ダイビング、舟遊び、海中公園、水上飛行、モーターボート等々の楽しみもあろう。人間は快適を欲する。汚れた海には快適さはない。石油や汚物の漂う海で以上のような娯楽があると思えるだろうか？ 観光レクリエーション資源を保全するためには、海を汚してはならない。山野、河湖を汚してはならない。美しい国土、美しい河海あってこそその祖国日本ではないか。経済繁栄のためにこの祖国の環境を破壊しつつけてよいものだろうか。自分

たち人間は生物であり、呼吸もし、水も飲み、動植物の食物をとり、安眠できて生きて行けるのに、環境を毒化し、自分たちで住み難くしておるのは自殺的行為ではないか。わかっていてなおかつ環境破壊行為もやめない人は犯罪者であり、人類の敵として告発されるべきである。

海洋性レクリエーションは結局のところ海洋環境保全を前提とする。景観をたのしみ、おいしい空気、新鮮美味な海の幸の味覚に舌鼓をうち、健康な生きがいのある生活に明日の動労の原動力を貯えるのが本旨ではないか。魚貝、プラクトン、海藻も海鳥も健やかに生育するきれいな海を保ち続けてこそわれわれ人間の生活の健康も約束されるのだ。「人間も驕るなかれ」といいたい。

「なに、汚染だなんて仰山な。大海で流せば拡散して消えてしまうさ。大気汚染なんて煙突を高くすれば風が吹き散らしてくれるよ。」とこう言い、楽観する人は、やがて急転直下事態が悪化し、ガン症状多発の渦にまきこまれたとき、「こんなはずじゃ無かった」というのだろうか。自分、自分の子、孫、家族に避け難い不幸の歴史と現われたとき、人のせいにしてすませられようか。予防できるときはその「おそれ」ある時以外にない。海水

に拡散したものが生物によって数千、数万、数十万倍に濃縮される事実、その濃縮されたものを人間が食物を通して摂取し、内臓、骨、血液が侵かされる事実を直視すべきである。汚染物質を拡散方式で処理して自浄作用に頼ることのできたのは昔で、今では細菌の自浄作用すら失われるにいたった汚染の急速進行中である。母乳、牛乳すら農薬汚染とは驚かされる。

海洋性閑暇利用観光、レクリエーションの根本原則は大自然を大せつに愛護すること、それ自体が自分たちの生活を守ることに通ずるということである。近利を追求に目が眩んで自分自身の生活も幸福も破壊するほど馬鹿げたことがあるだろうか。それが現に行なわれて来たのである。大気も海水も流れ動いている。「たれ流し」を続ける以上は悪化を防止し得ない。日本の国土を愛し、日本人を愛する日本教徒である以上、海を汚し傷け損ってはならない。また世界の中の日本人である以上、世界の良識に従うべきである。本来美しい世界に誇るに足る日本の自然と文化を、美しい日本人の魂をなんで破壊してよいだろう。

海洋環境の浄化保全に真の日本の繁栄がある。

人と同じでは…
貯らない

割引債

ワリチョー

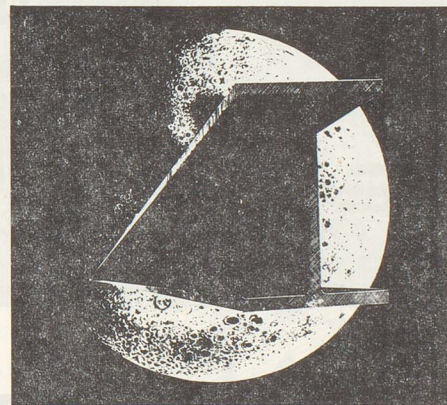
期間1年・利回り年6.213%・無記名

利付債

リツチョー

期間5年・利回り年7.638%・無記名

日本長期信用銀行



無重力の世界に挑む

冒険なくして文明の進歩はありません。私たちのつくる鉄もいまや、宇宙へ進出し、やがて、星の世界に鉄の時代を築くことでしょう。新日鐵は、無重力の世界に挑むために、より優れた鉄づくりに全力を傾けています。

新日本製鐵
本社 東京都千代田区大塚2-6-3 (新日鐵ビルディング)
電話 東京 (03)242-4111(大代表) 郵便番号 100